

学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.46

発行日 ● 令和3年(2021)9月1日

もくじ

ごあいさつ.....	1
I ボンボニエールの始まりの物語	2
II 外国との絆の物語	3
III かわいいの物語 / IV デザインとお印の物語	4
V 歴史の中の物語	5
VI 様々な形の物語	6
VII 様々な材質の物語	7
定家本 源氏物語「若紫」.....	8



大張子形ボンボニエール(金平糖と共に)
(継宮明仁親王(上皇陛下)誕生内宴) 昭和9年【個人蔵】

ごあいさつ

学習院大学史料館では、令和3年度秋季特別展として「ボンボニエールが紡ぐ物語」を開催いたします。橋本麻里・永青文庫副館長をお招きしての史料館講座はオンラインで行われますが、展示につきましては、皇室ゆかりの美しい工芸品であるボンボニエールの数々を北2号館1階の展示室でご覧いただく予定です。さまざまな歴史と結びついた、ボンボニエールの豊かな物語をぜひお楽しみいただければ幸いです。新型コロナウイルスの感染対策上、展示室の開室時間を例年より制限させていただくなど、ご来場の皆さまにはご不便をおかけしますが、何とぞご理解のほどお願いいたします。また、出品にご協力いただいた関係者の皆さまに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の秋季特別展では、源氏物語の写本のうち、藤原定家が校訂した「若紫」も展示いたします。大河内家ご所蔵の定家本「若紫」は、一昨年2月に見つかり大きな反響を呼びましたが、このたび一般社団法人 霞会館のご協力のもと、関東圏で初めて公開する運びとなりました。第一級の史料を展示できますことを大変嬉しく思うと同時に、大河内家と一般社団法人 霞会館の皆さまに心より御礼申し上げます。

(館長 水野謙)

ボンボニエールが紡ぐ物語

ボンボニエール(仏: Bonbonnière)とは、皇室の御慶事に際して制作・配布される菓子器です。フランス・イタリアなどの西欧諸国では結婚や子供の誕生の際に容器入りの菓子を配る慣習があります。

この慣習は明治中期に日本の皇室にもたらされました。日本では容器に加飾をすることで、伝統工芸の技術を継承し、職人の保護育成をはかり、海外への広報の役も担う日本独自の工芸品として発展します。手のひらにのるミニチュア感が人々の心を捉えたのか、皇室のみならず華族家や企業、一般家庭にまでその慣習は広がり、数百種におよぶ様々な意匠のボンボニエールが作られました。

皇室ではこの慣習が現在も続いており、御慶事の際にはボンボニエールが制作されています。令和元年の即位の礼、昨年の立皇嗣の礼の際にもボンボニエールが配られました。

本展では調査研究より明らかとなった歴史的背景からボンボニエールが持つ物語を紐解き、日本独自の美しい伝統文化と工芸技術など様々な側面をご覧いただきたいと思います。

この展覧会に、一昨年発見された定家本 源氏物語「若紫」(大河内家所蔵)を公開出来ることとなりました。

二つの雅やかな世界をご堪能ください。

(学芸員 長佐古美奈子)

I ボンボニエールの始まりの物語

現在の皇室にも続くボンボニエール、その最初の物語は明治22年(1889)に始まる。

皇室 西欧化への邁進

明治維新後、皇室にも怒涛の変化が押し寄せた。天皇が住み慣れた京都を後にし、旧江戸城に入ったのは、元号が明治となった1868年10月のこと。その半年後、英国王子が日本を訪問することとなった。初めての外国賓客へのおもてなしに際し、浜離宮内に迎賓施設延遠館を作り、高級料亭八百善から和食をデリバリーした。日本側は考え抜いて対応したが、日本が国際儀礼のルールを知らなかったために、英国側からは苦情が来た。

そこから皇室も猛然と西洋の風習を取り入れることとなる。まずは見た目からと、天皇は明治6年(1873)4月に断髪し、洋装となった。肉食も解禁し、宮中晩餐会の料理もフランス料理となった。

明治16年には鹿鳴館が竣工し、舞踏会が催されるようになった。しかし、人前で肌を見せることなどなかった婦人達はなかなかドレスを着用しなかった。そこで文字通り一肌脱いだのが皇后であった。明治20年の新年儀式にはドレスで臨み、そこから皇族や華族婦女子の洋装化が進んだ。皇后はドレスの生地や装飾には国産品の使用と伝統技術による加飾を奨励した。明治維新で職を失った者たちへの救済と伝統文化の保存のためである。

ボンボニエールの誕生

そして明治22年2月11日大日本帝国憲法発布式を迎えた。東アジアで最初の立憲国家となったことを国内外に示すため、前年に竣工したばかりの明治宮殿で大規模な儀式と饗宴が開催された。その宮中晩餐会、食後のプティフルが皿や盆ではなく、銀の箱や美しい織の袋入りで配られた。それが初のボンボニエール。菊御紋と「二五四九 紀元節」銘が入った様々な容器が1400個用意された〔図①〕。

次にボンボニエールが登場するのは明治27年、天皇皇后の銀婚式である。西欧の習慣である銀婚式を滞りなく行うことで、日本皇室が西欧式儀礼を身につけたことを示す意味があった。銀婚式に因んで種々銀尽し。皇后のドレスも屏風も銀、そしてボンボニエールも銀製オリジナルデザインで作られた。当時の新聞によれば、制作を請け負ったのは後に帝室技芸員となる鈴木長吉で、饗宴に招かれた621人には「蓋に岩上の鶴亀を付した銀製菓子器」〔図②〕が下賜され、立食の宴に参加した1208人には「鶴亀の彫刻ある銀製菓子器」〔図③〕が配られたのである。

天皇の即位の物語

ボンボニエールは、大正期から昭和初期にかけて大流行する。その契機となったのは、紛れもなく大正天皇の即位大礼であった。

大正4年(1915)11月10日から17日にかけて京都で行われた大正天皇即位大礼は、明治までとは異なる形式で実施され、令和の即位の礼の基準となる部分も多い。

大正天皇即位大礼は京都で行われ、東京・京都間は天皇が乗車する豪華なお召列車が走り、博覧会も開催された。東京でも奉祝門が仮設され、造花や電灯で飾り付けられた花電車が走るなど、祝祭であった。

11月10日に天皇が先祖に即位を奉告する儀式が、14・15日には「大嘗祭」が行われた。その後16・17日には二条離宮(旧二条城)で「大饗の儀」が開催された。大饗の儀は収穫された新作物を天皇より賜る節会。16日の大饗第一日には、各地方の特産物による和食が供された。その際に銀製の挿華が列席者に下賜された。大正の挿華は京都御所紫宸殿前の桜と橘を模している。お雛飾りにも欠かせない、左近の桜・右近の橘である。全長23釐ほどで、銀で制作しているが、その造作の細かいこと、特に蕊は圧巻である。制作は東京美術学校(現東京藝術大学)の平田重幸。平田は17日の大饗第二日の入目籠形のボンボニエール〔図④〕の制作も担当した。入目籠とは、大嘗祭において、神に捧げる神衣を入れる神具のこと。これも繊細な竹編みを銀で表現している。

大饗第二日の昼と夜のメニューは即位礼史上初めての洋食となった。列席者2000名を超える晩餐会の献立から調理まで、全てを取り仕切ったのは「天皇の料理番」秋山徳蔵である。この夜宴の際には柏葉筒形のボンボニエール〔図⑤〕が配られた。柏の葉の重なりを銀で表現し、紐のかかる部分の葉には、わざわざ折込みを作るという細かい仕様がなされている。

京都での諸儀式の後、12月7日・8日には宮中饗宴が催されたが、この際には八稜鏡形ボンボニエール〔図⑥〕が下賜された。

この頃よりボンボニエールには品位(金属の含有量)や製造者を表す刻印が認められるようになる。八稜鏡形では、「三越」「玉屋」「村松」など数種類の業者名を確認できる。数千個という大量生産に対応するために、分散して発注制作されていたのである。



②



①



③



④



⑤



⑥

①片喰形黒塚文(大日本帝国憲法発布式)明治22年 ②鶴亀形(明治天皇大婚25年祝典)明治27年 ③正円番合形鶴亀文(明治天皇大婚25年祝典)明治27年 ④入目籠形(大正天皇即位礼大饗第二日)大正4年 ⑤柏葉筒形(大正天皇即位礼大饗夜宴)大正4年 ⑥八稜鏡形鳳凰文(大正天皇即位礼宮中饗宴)大正4年 ⑦太鼓形(昭和天皇即位礼大饗第二日)昭和3年 ⑧釣籠形(昭和天皇即位礼大饗夜宴)昭和3年 ⑨威儀鉢形(昭和天皇即位礼宮中饗宴)昭和3年 ⑩丸形鳳凰文(平成即位記念)平成2年 ⑪丸形鳳凰文(令和即位記念)令和元年 ⑫番合形案に鶯鶯文(立皇嗣記念)令和2年 ⑬柳筒形(常宮昌子内親王・竹田宮恒久王結婚)明治41年 ⑭台付文庫形(周宮房子内親王・北白川宮成久王結婚)明治42年 【①~④、⑩⑫は個人蔵、ほかは当館蔵】

II 外国との絆の物語

外国と友情を育むことは、皇室の大事な公務。
明治・大正・昭和と、その時代時代で絆が紡がれた。

日英の絆の物語

明治の御代、日本皇室は英国王室を模範とし、絆を深めた。

明治39年(1906)、明治天皇にガーター勲章を奉呈するためにコンノート公爵家のアーサー王子(コンノート卿とも呼称)が来日した。ガーター勲章は、1348年にエドワード3世によって創始されたイングランド・ガーター騎士団団員章である。英国民でこの騎士に叙せられるのは24人以内に限定されており、大変な名誉のもの。外国王には「特別騎士」として別枠があるが、それも現在8人のみである。騎士団はキリスト教徒が対象となる栄典である。その勲章が異教徒である明治天皇に東アジアの元首として初めて授与された。

その後、大正元年にも明治天皇の大喪儀に参列するため大正天皇へガーター勲章を奉呈するためアーサー王子が来日した。勲章は被授与者が亡くなると返上するため、明治天皇の崩御後すぐに英国王室は次代の天皇へのガーター勲章奉呈を決定したのである。その饗応晩餐会でのボンボニエールが扇形のものとなる[図a]。大正7年(1918)、大正天皇へ元帥杖贈呈のためにアーサー王子三度目の来日の際の宮中晩餐会では、まさにガーター勲章が文様となったボンボニエール[図b]が配られた。

大正天皇崩御の後、昭和天皇も昭和4年(1929)にガーター勲章を授与された。だが、昭和16年の対米英開戦とともにその栄誉が剥奪される。しかし、30年後の昭和46年、昭和天皇訪英の際に栄誉回復となった。ガーター勲章の長い歴史の中でも、一度剥奪された栄誉が再び回復されたのは、昭和天皇ただ一人である。

二人の皇太子の物語

その昭和天皇(裕仁親王)は、皇太子時代の
大正10年3月外遊の途についた。ヨーロッパ諸国
を荒廃させた第一次世界大戦が大正7年に終結
し、次代の天皇に世界を見聞し見識を広げて欲
しいとの国内での期待を受けての渡欧である。

5月9日英国に到着した裕仁親王はバッキンガム宮殿に3泊するという、英国王室極上のおもてなしを受けた。公式な贈答品は日本の伝統工芸品であったが、裕仁親王は会う人々へ折に付け文庫形唐草文のボンボニエールを贈ったという。

その後、半年に渡り欧州各国を歴訪した裕仁親王は、西欧諸国王室との交流を深めただけでなく、戦争の悲惨さも深く心に刻まれた。また西欧のリベラルな考え方や振る舞いもしっかりと身に付け、意義深い長い旅を終え、9月3日に帰国した。

帰国後の9月15日帰国祝賀の饗宴が開催され、鳩に地球儀形のボンボニエール[図c]が下賜された。平和の象徴である鳩3羽が地球を支えるモチーフは第一次世界大戦後の世界平和への願いが込められている。

翌大正11年には答礼として英国皇太子エドワードが来日した。エドワードは現在の英国女王エリザベス2世の伯父にあたる。来日途上の船内で「日本語のお稽古に熱心」であったことなどが新聞報道され、日本国内で大変な人気となったエドワード皇太子をもてなす宮中晩餐会では、印籠形のボンボニエール[図d]が配られた。表面には桐文が彫られ、緒締には珊瑚玉、赤銅の桜花形の根付をつけた技巧の凝らされた品である。

この大正大礼の諸様式は昭和大礼にも引き継がれ、昭和大礼でも儀式で使用される器物を模ったボンボニエールが作られた[図⑦~⑨]。

そして、平成、令和の即位に際しても同様にボンボニエールが制作されているのである[図⑩~⑫]。



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

皇女たちの結婚の物語

明治天皇の子供たちのうち、成年に達した男子は皇太子(大正天皇)一人であったが、内親王のうち4人は健やかに成長され明治40年代から大正初年にかけて結婚し、それぞれの婚儀の際にはやはりボンボニエールが制作された。

明治41年に常宮昌子内親王が竹田宮恒久王と結婚した際のボンボニエールは柳筥形[図⑬]。柳筥とは、神への供え物を納める際等に使用されるもので、白木の柳を細い三角形に割り並べ、糸で綴じた蓋付きの精巧な容器である。正倉院宝物にも十数点が残し、現在でも伊勢神宮では真珠などの神宝を収納する箱として使われている。それをボンボニエールでは、純銀の板と銀糸で再現し、さらに蓋表に菊の御紋を配し、赤色の絹の組紐が付けられた。この銀糸の繊細さは筆舌に尽くしがたい。

明治42年、周宮房子内親王と北白川宮成久王との結婚に際しては、文庫形ボンボニエール[図⑭]が制作された。文庫とは手紙や日記などを納める箱のことである。いずれも伝統的な「箱」を模したものであった。



⑬



⑭



b



d



c

a.扇形桐紋(ガーター勲章奉呈式後晩餐)大正元年 b.楕円煙草入形ガーター勲章紋章(アーサー王子饗応晩餐会)大正7年 c.鳩に地球儀形(東宮(昭和天皇)帰朝祝賀晩餐会)大正10年 d.印籠形(英国エドワード皇太子歓迎晩餐会)大正11年【abは個人蔵、ほかは当館蔵】

III かわいいの物語

ボンボンニエールの魅力は何と言ってもそのかわいらしさ。

うさぎ置物形

皇太子裕仁親王と久邇宮良子女王(香淳皇后)は大正13年(1924)1月26日に結婚した。婚儀を1週間後に控えた1月19日、久邇宮家では良子女王との送別の宴が執り行われた。うさぎ置物形〔図①〕はその際のボンボンニエールである。

良子女王は明治36年(1903)3月6日、久邇宮邦彦王・梶子妃の第一女子として誕生した。生年が卯年であったことから、香淳皇后はうさぎの意匠を終生こよなく愛した。皇后制作のうさぎの置物も残っている。



①

犬張子形

昭和天皇と香淳皇后は大変仲が良く、夫婦喧嘩をしたことは1回もなかったといわれるほどである。お二人の間には4人の内親王が誕生し、結婚10年目の昭和8年(1933)12月23日、第5子にして初めての男子が誕生した。皇室のみならず、国内の喜びの沸き立ち方は並々ならぬものがあった。誕生した皇太子の称号は「継宮」、お名前は「明仁」。そしてお印は「榮」となった。「皇太子殿下御誕生」を寿ぐ宮中祝宴は、翌昭和9年2月23日から4日間にわたり開催された。このうち1日目の招待者に配られたのが、舞楽兜形ボンボンニエールである。舞楽「萬歳楽」に用いられる鳥兜を模して作られた。そして内宴の際に配られたのが、犬張子形ボンボンニエール〔図②〕である。まんまるお目目におくおくとした体形がなんとも愛らしい、しかも菊の御紋を背負っているという高貴さ。皇太子の健やかな成長を願ってのボンボンニエールである。



②

でんでん太鼓形

第二皇子として昭和10年11月28日に生まれたのが、義宮正仁親王である。正仁親王の誕生内宴の際に配られたのは、でんでん太鼓のボンボンニエール〔図③〕である。でんでん太鼓は言わずと知れた赤ちゃんをあやすおもちゃ。胴締め糸を銀糸で表現し、柄や太鼓面は銀といぶしを組み合わせるなど、なかなか凝った作りである。開き方も独特で、巴文の部分をくりと横にすべらせる仕掛けである。ご兄弟で「おもちゃ」シリーズのボンボンニエール、何とも洒落ている。



③

IV デザインとお印の物語

皇室の御慶事に際し、相応しいデザインで制作されるボンボンニエール。
これは誰がプロデュースしたのだろうか？

皇后さまの思召し

昭和3年(1928)、秩父宮雍仁親王・松平勢津子の結婚に際し、貞明皇后は内輪の祝宴を開いて、鼓形ボンボンニエールを列席者に贈った。勢津子妃は、「皇太后さま(貞明皇后)御自らデザインあそばしたもので、胴の部分には宮さまのお印の若松の模様と星の模様が、小さく幾つも浮き彫りにされております。皇太后さまのなみなみならぬアイディアとセンスに、つくづく感服せずにはいられません」と記している(秩父宮妃勢津子『銀のボンボンニエール』講談社 1994年)。

昭和10年(1935)の北白川宮永久王・徳川祥子結婚の際のボンボンニエールは永久王のお印「玉(勾玉)」と祥子妃のお印「紅梅」が八稜鏡の上に描かれたもので〔図A〕、古代史マニア垂涎の一品。「玉御模様ハ王殿下御印 紅梅御模様ハ妃殿下ノ御印ニシテ立梓梅ノ御模様ハ妃殿下御五衣ノモノ畏レ乍ラ大宮様ノ御考案遊バサレシモノナリ」と印刷された紙を伴っており、このボンボンニエールも貞明皇后(大宮様)がデザインしたことがわかる。

永久王・祥子妃の結婚後、貞明皇后主催の初晩餐会で贈られたのは貝桶形流水菊花葵文のボンボンニエール〔図B〕。貝桶は貝合わせ(貝覆い)用の入れ物である。貝合わせは対となる貝以外とは組み合わせることが出来ないことから、夫婦和合の象徴となり、婚礼調度の中でも最も重要なものとされた。その貝桶に描かれた文様は天皇家を表す菊と祥子妃の実家徳川家を表す葵。こちらも貞明皇后がデザインしたのであろう。

現在でも宮中晩餐会の献立や飾花については皇后の意向が反映されると聞く。ボンボンニエールにはその細やかなお心遣いが感じられるのである。



A



B

① 兎置物形(久邇宮良子女王送別) 大正13年 ② 犬張子形(継宮明仁親王(上皇陛下)誕生内宴) 昭和9年 ③ でんでん太鼓形(義宮正仁親王誕生内宴) 昭和10年
A. 八稜鏡形勾玉に梅樹文(北白川宮永久王・徳川祥子結婚) 昭和10年 B. 貝桶形流水菊花葵文(北白川宮永久王・祥子妃大宮御所初晩餐) 昭和10年 C. 羽子板形桐桃文(北白川宮) 佐和子女王御里開
昭和10年 D. 丸形柵に檜扇菖蒲文(秋篠宮文仁親王・川嶋紀子結婚) 平成2年 E. 卵形色絵石南花文(常陸宮華子妃退隱記念) 平成12年 F. 番合形色絵柏文(紀宮清子内親王・黒田慶樹結婚) 平成17年
G. 四角形色絵萩文(高円宮) 承子女王成年) 平成18年 【②③、BCEは個人蔵、ほかは当館蔵】

お印

ボンボニエールのデザインに欠かせない「お印」。お印とは皇族や華族家の人々などが、記名の代わりとして、身の周りの品につける印章のことである。その昔、高貴な方に仕える人々が、高貴な方の名前を直接口にするのは畏れ多い、ということで出来た慣習という。

皇族の方のお印は誕生や結婚など、皇族となる際に決められる。男性皇族は植物、女性皇族は花であることが多いが、雪や星、また文字という場合もある。お印を用いた様々なデザインをご覧いただきたい〔図C～G〕。



V 歴史の中の物語

皇室の美しい工芸品は近代史の目撃者でもあった。

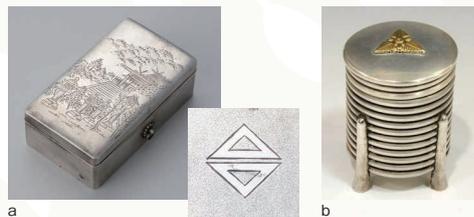
台湾総督府・樺太庁のボンボニエール

台湾は明治28年(1895)日清戦争後の下関条約によって、澎湖諸島とともに清国から割譲され、以降昭和20年(1945)までの半世紀、日本の統治下におかれた。台湾統治のために明治28年6月に台北に設置されたのが台湾総督府である。

その台湾総督府製のボンボニエールがある〔図a〕。蓋表面に神社の図が描かれ、蓋裏に台湾総督府の紋章が刻印されている。この神社はかつて台北にあった台湾神社と思われる。台湾神社は明治34年に創建された。祭神は北白川宮能久親王と開拓三神。能久親王は、明治28年に台湾平定のため近衛師団長として出征した。しかし、台湾でマラリアに罹患し、同年10月28日台南にて死去した。皇族で初めての海外殉職者であったことから、台湾神社創建の際に祭神となった。台湾神社は台湾の総鎮守として、台湾で最も重要な神社とされた。

大正12年(1923)4月12日には皇太子(昭和天皇)が台湾行啓の際に台湾神社へ参拝している。恐らくはその際に制作されたと推測されるボンボニエールである。

樺太庁は明治38年日露戦争後のポーツマス条約の結果、日本領となった北緯50度以南の樺太統治のため、明治40年に設置された行政官庁である。図bは昭和6年8月の閑院宮戴仁親王の樺太・北海道方面視察の際のものと思われる。



李王家のボンボニエール

李王家紋が附されたボンボニエールが数多く残る。王公族として御慶事の際にボンボニエールを制作したと考えられる。日本のボンボニエールは、日本の伝統的な器物の形を模し、職人保護のため伝統的な工芸技術を以て制作され、そして諸外国への広報的役割も担っていた。李王家のボンボニエールもおそらく同じ意図をもって制作されたのだろう。李王家が選択した伝統的な器物の形、それは李朝祭祀の際に祭器として用いられた古代中国の青銅器の器形であった〔図c～e〕。

李王家紋のボンボニエールには「漢美」「漢城美術」「美」という製造者を表す刻印を伴うものが多い。これは「漢城美術品製作所」、「李王職美術品製作所」を指す。

「漢城美術品製作所」は、1909年大韓帝国時代に設立された美術品の製作所である。1911年からは李王家の直管となり「李王職美術品製作所」と名を改めた。製作所のモットーは「日本で製作する美術工芸品より低廉で、良い材料を使用し、質の良い製品を送り出すこと」。当初は「金工部」「染織部」の2局で開始されたが、その後部署は次第に増え、螺鈿漆器や青磁、粉青沙器など朝鮮伝統工芸品の製作がなされた。



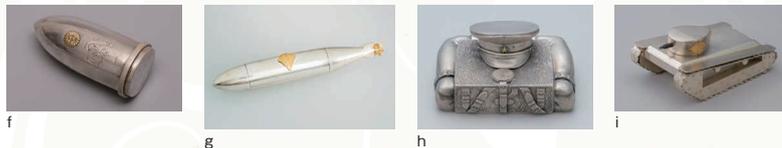
戦争の足音

お祝い事の際に作られ、周りの方々と慶びを分かち合う菓子器、ボンボニエール。昭和の初め頃から兵器を模ったボンボニエールが登場するようになる。もっともこの形として、祝事を寿ぐ意匠であったのであるが。

まずは砲弾形〔図f〕。昭和6年10月26日に北白川宮永久王が陸軍砲兵少尉に任官した際のボンボニエールである。昭和6年は、以後15年に及ぶ日中戦争の発端となった満州事変が起こった年である。そのような未来を暗示するかのような砲弾形。形は美しく、永久王のものと思われるイニシャルがアンティーク風にデザインされ、刻印されている。永久王はこの数年後、非業の死を遂げることとなる。

次は、魚雷形のボンボニエール〔図g〕。朝香宮正彦王が昭和10年1月28日に成年式を迎えられた際のボンボニエールである。正彦王は昭和9年に海軍兵学校を卒業し、翌年戦艦榛名への乗組を命じられた。こういった経歴から魚雷形のボンボニエールを制作したのであろう。背囊形〔図h〕は昭和9年に澄宮(三笠宮)崇仁親王が陸軍士官学校予科を卒業されたお祝い。そして、最後は極めつけ、戦車形のボンボニエール〔図i〕である。昭和8年、朝香宮学彦王が陸軍歩兵少尉に任官された際に作られたものである。

深みに嵌るまで、立ち位置に気が付かないことがある。このボンボニエールを作っていた頃はまだ戦争の悲惨さは遠いものであったのかもしれない。



a.箱形神社図 b.行器形樺太庁紋 c.匣形雷文鏤 d.鏢斗形 e.注口付扁壺形 f.砲弾形(北白川宮永久王陸軍砲兵少尉任官祝)昭和6年 g.魚雷形(朝香宮正彦王成年式晩餐会)昭和10年 h.背囊形(澄宮崇仁親王陸軍士官学校予科卒業祝)昭和9年 i.戦車形(朝香宮学彦王陸軍歩兵少尉任官祝)昭和8年 [abghiは個人蔵、ほかは当館蔵]

VI 様々な形の物語

ボンボニエールの様々な形。日本の伝統文化や金工産業の技術力の高さを外国に広報する役割を担った。

掌上の外交官

ここまでご紹介したようにボンボニエールは饗宴ごとにオリジナルなデザインで制作されていた。しかし実は、年代や祝宴名が特定出来ない特殊なカテゴリーに属しているボンボニエールがある。

それは外国大使をもてなす際などに配られたもの。こういった比較的小規模な晩餐会や午餐会では、予め意匠を決め発注し、作り置きしていたストックのボンボニエールを使用していたのである。また小宴の際は数種類を数個ずつ配布しているので、同じ小宴に列席していたとしても、持ち帰ったボンボニエールは個人により異なり、さらには異なる小宴に出席していても、同種同形のボンボニエールを所有する人がいたのである。

こういった作り置きのボンボニエールは兜、諫鼓鶏、牛車、駕籠、御座船など、いずれもいかにも日本的と言える意匠であった〔図①～⑧〕。皇室は外国賓客が日本的な意匠のものを好むことをよく理解しており、このような意匠のボンボニエールを外国賓客が持ち帰れば、日本の文化や伝統工芸の技術力の高さを広める役割を担うことが出来ると考えたのであろう。

ボンボニエールは掌上の外交官でもあった。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

どこが開くの？

ボンボニエールは菓子器である。なので、どこかが開いて、金平糖などの菓子が入れられなければならない。しかし中にはどこが開いて菓子が入るのか、わかりにくいボンボニエールも存在する。

その筆頭は複葉機形〔図⑨〕であろう。このボンボニエールは朝香宮孚彦王の成年式のものである。孚彦王は大正元年(1912)に誕生。学習院初等科卒業後陸軍士官学校に入学し、昭和8年(1933)に卒業。元々飛行機が大好きで、航空科配属を希望していたが、皇族が飛行機に乗るのは危険と言われ、歩兵となった(5頁参照)。昭和18年に漸く陸軍航空本部に転科となり、大空を自身で操縦桿を握って飛ぶという念願を果たした。その孚彦王の昭和7年の成年式の際のボンボニエールが複葉機形のものとなる。それにしても、金平糖がいくつ入るのか？〔図⑩〕。

もう一つも飛行機関連のもの、プロペラ形〔図⑪〕である。このプロペラ形には悲しい物語がある。朝香宮孚彦王以前に「空の宮様」と呼ばれていた皇族がいる。山階宮武彦王である。武彦王は、明治31年(1898)に誕生した。大正4年海軍兵学校予科入学し卒業後は海軍に入り、当時入隊希望者の少なかった海軍航空隊に入隊、皇族で初めて東京上空を飛行した。大正11年7月19日に賀陽宮佐紀子女王と結婚。翌年懐妊中であつた佐紀子女王は暑い東京を避け、賀陽宮家鎌倉別邸に滞在していた際に関東大震災に遭遇した。佐紀子女王は居間の欄間の下敷きとなり、お腹の中の子共々圧死した。まだ20歳という若さであった。1年前に結婚したばかりの妻とまだ見ぬ我が子を同時に亡くした武彦王の悲しみは想像を絶する。武彦王はその後、徐々に精神を病んでいった。

武彦王は大正14年3月に民間パイロット養成機関「御国航空練習所」を立川の陸軍飛行場の一部に自費にて創設し、翌大正15年3月には第一期生が誕生した。その際の記念として作られたのが、プロペラ形のボンボニエールである。しかし、武彦王の病状が悪化し創設した練習所へも赴けなくなった。そして同年7月5日、御国航空練習所は短い幕を閉じたのである。



⑨



⑩

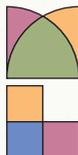


⑪



⑫

①御座船形 ②軍扇形 ③諫鼓鶏形 ④鎧兜形 ⑤牛車形 ⑥香炉形 ⑦駕籠形 ⑧武士兜形 ⑨⑩複葉機形(朝香宮孚彦王成年式) 昭和7年 ⑪⑫プロペラ形(御国航空練習所第一期操縦員修了記念) 大正15年 【②④⑫は個人蔵、ほかは当館蔵】



Ⅶ 様々な材質の物語

ボンボニエールと言えば「銀」というイメージだが、実は様々な素材で制作されている。

漆

漆のボンボニエールには日本的な繊細の美が感じられる。大正の初めには家が途絶えてしまった有栖川宮家の美しい漆の小箱が遺る〔図a〕。



a

江戸時代より続く名門の宮家であり、天皇家の書道師範の家でもあった有栖川宮家。熾仁親王は明治政府の基本方針・五箇条の御誓文を揮毫。その子熾仁親王は戊辰戦争の将であり、明治政府において重要な職を歴任した。明治28年(1895)の死去に際して有栖川宮家を継いだのは弟の威仁親王である。

威仁親王は16歳から28歳までをほぼ外国で暮らしており、国際感覚を身に付けていた。明治24年に来日中のロシア帝国の皇太子(後のニコライ2世)を警察官が切りつける事件(大津事件)が発生。接遇を担う威仁親王は即座に適切な対応を取り、強国ロシアを怒らせずに事態を收拾したことで有名である。

外国通の威仁親王は、ボンボニエールもかなり早い段階で導入している。明治26年に来日したベルギー特命全権公使夫人エアノーラ・ダヌタンは、「デザートのように、有栖川宮家の家紋が金漆で描かれた黒い漆塗りの美しい小箱が、その日の記念に各人に贈られた」「恒例の綺麗な漆塗りの箱が私たちに贈られた」と度々日記に記しており、この頃の有栖川宮家の饗宴では、「漆塗りの美しい小箱」が配布されていたことが確認できる。

七宝

七宝焼とは、銀や銅などの「金属」の表面に色とりどりのガラス質の釉薬をのせて焼き付けたもので、紀元前の古代メソポタミア文明や古代エジプト文明にすでに存在した。日本では天保3年(1832)より七宝焼が広く作られるようになった。

日本の七宝焼が世界に知られることになったのは、明治6年のウィーン万博。以来、各地の万博に日本から多くの七宝焼が出品され、その巧妙さ・精美さで、世界的に高い評価を受け、ジャポニズムブームの中、明治期の主要な輸出産業となった。皇室でも贈答品に多く用いた。

昭和4年10月7日に昭和天皇第三皇女・孝宮和子内親王の命名祝宴が開かれた。その際のボンボニエールは文庫形葉菊文。七宝の美しいボンボニエールである。このボンボニエールには葉菊文描写技巧が異なる2種類があることが確認されている。1種は素地の上に金属線で模様を描き、そこに異なった釉薬を入れて焼き付けることで図柄を作る有線七宝。もう



d

1種はさらに釉薬を重ねることで、立体的な表現が得られる盛上七宝である〔図d〕。二つの業者に発注したことでこの差異があるのか、または渡す相手により差をつけたのか、真相は不明である。

陶磁器

陶磁器製のボンボニエール、その初見は、三笠宮崇仁親王・高木百合子の結婚に際し、貞明皇后から贈られたものになる。戦争が長期化してきた昭和15年(1940)、軍事色は濃くなり、日常生活においてさまざまな制限が出、また物資の不足も顕在化してきた。そういった中、同年7月7日に施行されたのが、宝石や銀製品などの製造・加工・販売を禁止した、いわゆる贅沢禁止令(奢侈品等製造販売制限規則)である。このため皇室の方々であっても、銀でボンボニエールは作れない状況となった。

崇仁親王・百合子妃は昭和16年に結婚した。御慶事であるのだから、当然ボンボニエールを作ることになる。だが、銀では作れないため、見た目はさほど銀とかわらないジュラルミンで制作した。そして貞明皇后がお二人を招いて開いた内宴で配られたのが、陶磁器製のボンボニエール〔図b〕である。おめでたい末広がりの扇形の蓋面には、宮家名の由来となった奈良の三笠山と崇仁親王のお印「若杉」、百合子妃のお印「桐」が描かれている。扇のかなめの部分には銀彩で菊御紋を配す。身の側面には唐草と鳳凰が彩り鮮やかに描かれている。銀で制作出来なかった分、思い切り華やかにデザインする、との意気込みを感じる作品である。

お二人には昭和19年4月26日に最初のお子様が生誕した。戦争が激しさを増し、身重の妃殿下は沼津の御用邸東附属邸に疎開、そこで甯子内親王は誕生した。内親王御誕生に際してのボンボニエール〔図c〕も、時代を反映しての磁器製である。白い磁胎の鶴は、親子の情愛を示す巢籠鶴形。掌にそっと置きたい、愛しい一品である。



b



c

プラスチック

このボンボニエール〔図e〕は順宮厚子内親王が学習院女子高等科卒業記念の茶話会に際して、同級生に贈ったものである。厚子内親王は昭和6年3月7日に昭和天皇・香淳皇后の第四皇女として誕生した。学習院初等科、学習院女子中等科・高等科に学び、昭和24年に卒業。学習院女子短期大学に進み、卒業後に元岡山藩主・侯爵家の池田隆政と結婚した。全体は緑色で、蓋部分は透明クリスタルのような仕様になっている。その蓋部に厚子内親王のお印「菊桜」があらわれている。桜は八重桜で、学習院女子中・高等科の校章でもあるので、皇室と学習院を表しているようにも見える演出である。



e

(2~7頁/学芸員 長佐古美奈子)



〔図1〕旧表紙

平安時代、紫式部によって著された源氏物語は、その成立以来写本や版本によって伝えられ、今なお読み継がれている。残念ながら紫式部の手がけた原本は残っておらず、国宝「源氏物語絵巻」の絵巻の詞書という特殊な形の本文を除けば、鎌倉時代以降に書写されたものしか伝存せず、藤原定家(1162-1241)が監修、校訂した定家本、いわゆる青表紙本もその一つとされる。

鎌倉時代の歌人である定家は、古典の書写、校訂による証本の作成、注釈にも携っていた。源氏物語においても、本文を書写する過程で当時すでに写し間違いなどが多く、正確な元の形がわからなくなっていたため、定家はより正しい本文を追求しようと試み、家中の少女等に源氏物語を書写させていたことは『明月記』の嘉禄元年(1225)二月十六日条「自去年十一月、以家中小女等、令書源氏物語五十四帖、昨日表紙訖、今日書外題、(後略)」に確認できる。

表紙に青色の料紙を用いたことから青表紙本とも呼ばれ、今日読まれる源氏物語の本文の基準にもなっている定家本は、これまで「花散里」「行幸」「柏木」「早蕨」の4帖のみが確認されており、いずれも国の重要文化財に指定されている。

そして源氏と紫の上の出会いを描く「若紫」帖が一昨年、三河吉田藩主家大河内家より発見され、大きな話題を呼んだ。本文は定家本系統の大島本とほぼ一致し、定家本の特徴である『源氏釈』等の注釈を巻末に記した「奥入」が確認でき、貴族が用いる青墨による書き込み(40丁表5行目の補入「○あり」)や、63丁裏「奥入」の「ゆほひか」の、「のへ」の上に書かれた「水」が定家の校訂と想定されることなどから定家本と認められている。また伝来については、明治6年(1873)の大河内家の所蔵目録「豊橋御道具記」乾冊に記され、寛保3年(1743)に福岡藩主黒田継高つぐたかから当時老中を務めていた大河内松平家の松平信祝のぶときに譲渡されたことがわかっている。

(助教 谷嶋美和乃)

学習院大学史料館からのお知らせ

令和3年度学習院大学史料館秋季特別展 「ボンボニエールが紡ぐ物語」

【主催】学習院大学史料館

【共催】一般社団法人 霞会館

【協力】学習院大学文学部日本語日本文学科

【会期】令和3年9月13日(月)～12月3日(金)

開室：月～金曜 12:00～15:00

閉室：土・日曜、祝日

*9月中は11:00～、祝日(20・23日)も特別開室。

*新型コロナウイルスの感染状況によっては変更する場合があります。最新の情報は史料館のホームページをご覧ください。

【会場】学習院大学史料館展示室(学習院大学 北2号館1階)

*入場無料

【関連講座】第93回学習院大学史料館講座

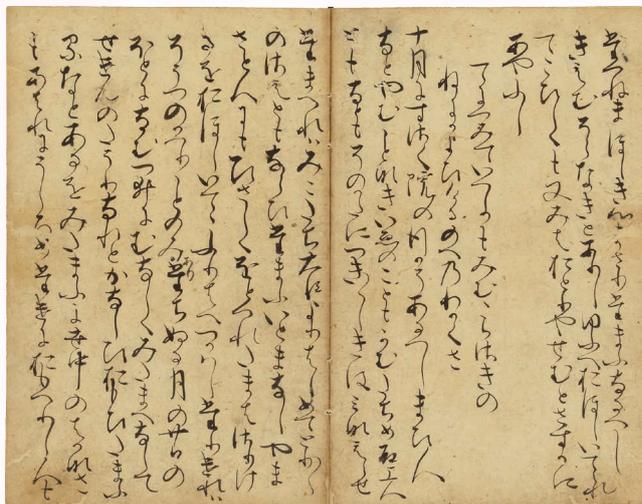
《対談》「物語の玉手箱 ボンボニエール」

橋本麻里氏(永青文庫副館長)×長佐古美奈子(当館学芸員)

※WEB上にて10月より配信予定

もっと詳しくお知りになりたい方は

長佐古美奈子 | 紡ぐプロジェクト(yomiuri.co.jp)をご覧ください。

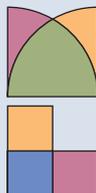


〔図2〕(右)39丁裏 (左)40丁表

写真提供：八木書店出版部

ミュージアム・レター第46号

令和3年(2021)9月1日発行
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
電話 03(5992)1173
FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>